

留学生との交流による多文化共生のまちづくり -とくしま異文化キャラバン隊 2016 -

Gehrtz 三隅 友子

GEHRTZ-MISUMI Tomoko

徳島大学国際センター

要旨：国際センターは、平成 25-27 年度に文部科学省の委託により留学生交流拠点整備事業「異文化キャラバン隊による国際化と、新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」を実施した。3 年に渡る本事業では、地域を舞台に留学生との様々な交流活動を通して、地域の課題と一緒に考え、「多文化共生のまちづくり」の基盤づくりを行った。ここから 2016（平成 28）年度は、①どのように事業を継続するのか（資金調達も含めて）、②つながりのできた様々な組織とのさらなる協力関係（コンソーシアム）の構築、③徳島という一地域が必要としている問題の精査と新たな目標の設定を検討しながら、「とくしま異文化キャラバン隊 2016」として活動を展開した。実際には、1 年でこれまで以上の活動数と参加人数を記録し成果があげられた。本稿は 1 年を振り返り、上記の三つの観点から事業を考察し、新たな課題と今後の方向性を提示する。

キーワード：サービスラーニング・演劇的知・多文化共生・対話・デザイン・移民

1. はじめに

国際センターは、平成 27 年度に文部科学省委託事業「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」をテーマに掲げ、留学生を中心とする様々な活動を行ってきた（注 1）。平成 28 年度は継続事業としてどう展開させるかが課題であった。本稿は、「とくしま異文化キャラバン隊 2016」事業を概観するとともにこれまでとの変更点や充実した経緯を述べ、さらに今後の課題や方向性について考察する。

2. とくしま異文化キャラバン隊

2.1. 2016 年度の活動

これまでと同じく四つのプランを設定して実施した（注 2）。地域と活動内容は以下である。

PLAN 1：徳島市内の組織や団体との交流を中心とした多様な活動

PLAN 2：徳島県西部美馬市「脇町劇場オデオン座」でのパフォーマンスを通して、街の文化財である劇場の活用を促進する活動

⇒今年度より名称を「まほろば国際プロジェクト」から「オデオン座国際プロジェクト」

に変更した。

PLAN 3：徳島県南部美波町の日和佐八幡神社の祭りを支援し、地域の活性化を考える活動

⇒名称「日和佐の魅力発見！プロジェクト」



図 1 PLAN と県内活動予定地域の関係

PLAN 4：PLAN 1-3 の活動を総合的に推進し、広報を含め、事業全体を見直し今後の目標を新たに設定する活動

⇒事業をデザインする役割と機能を持つ。

いずれも、徳島大学が中心となって地域コンソーシアムを組織し、留学生と日本人学生（高校生も含む）からなる「異文化キャラバン隊」を各地域へ派遣することにより、地域の人々との異文化交流を通じて「外国人が身近にいることが当たり前の国際社会」「文化や習慣の違いを認め合いながら暮らすまちづくり」を目標に展開した。これは従来通りと言える。



図2 PLAN1-4の関係 2016～

2.2. PLAN4 新たな事業のデザイン

平成27年3月にはPLAN4の以下の四つの目標に関しては達成ができたと考えている。

- ① 県下の留学生を支援するコンソーシアムの充実化、実際の様々な活動から連携協力が可能となった。
- ② とくしま国際フレンドシップ憲章（平成20年3月徳島県が制定）の三つの行動目標の合言葉「知りあおう、ふれあおう、みとめあおう」の次のことば「笑いあおう」を提言として作成した。
- ③ 関わった地域の人からのそれぞれの物語を記述してもらい報告書を作成し、配布及び電子書籍を掲示をしている（注3）。
- ④ 平成27年1月に成果共有を目的としたフォーラムを開催した（注4）。

これらを踏まえて、事業を継続しながら新たな目標として「多文化共生のまちづくり」その具体的な方向性として「新たな移民の可能性を考える」を設定した。当初留学生に対する日本人及び日本文化理解から始まった事業であるが、今年度からは「徳島型の移民社会」を目標に置き、以下四つの項目を意識した活動を行った。それらは地域の日本人への啓発である。

1) 日本語を共通語に⇒通じる日本語を話す

自分たちの話す日本語は外国人にとって分

かりやすいのか。誤解を生じやすい表現や方言を使っていないのかという、自らの日本語を見直すこと。

2) 文化（考え方や習慣）を分かり合う

摩擦が起こった時に、その原因を相手側の文化と照らし合わせて、見方を変えていくことを試してみる。

3) 「おもてなし」から「おもてなしを越えた」つきあいをする

四国の持つ遍路の「お接待文化」から始めて、他者への施しが自分や社会を守り暮らしやすくするための行為であることを認識する。

4) 受け入れる心を育てる

徳島が置かれている現状を鑑み、将来を見据えた異文化の人との付き合いを、対話を通して地域に根付かせていく。

「郷に入れば郷に従え」の言葉通り、他所から来た人に「同化」のみを要求するのではなく、どうしたら「共存」しつつ新しい社会を作っていくかを、共に考え、実行していく必要があると考えている。

2.3. 広報活動

新たなチラシを作成し、広報活動を継続した。表面には、「留学生との交流によって、外国人の視点から徳島の魅力を再発見し、地域の問題を一緒に考えること」への参加を呼びかける内容を、また裏面にはPLAN1-4の具体的な活動を写真入りで紹介し、地域の組織や団体からのキャラバン隊への新規の活動依頼を期待した。このチラシも教育機関等への配布を行った。千鳥のロゴをシンボルとし、オレンジ色のエプロンは継続して、各イベントでキャラバン隊が着用して、活動を印象づけアピールすることをねらった。

ホームページは、国際センター内に配置し、すべての活動をブログで紹介し、また徳島大学アプリ「とく大ナビ」及び徳島大学ニュースへ掲載することを続けた。



図3 チラシ・エプロン・ロゴ

2.4. 活動を通じた成果物

活動を通して、内容の記録と新たな広報の意味で今年度もできる限り印刷物と映像の作成を試みた。これらにはプロジェクトワーク型の教育活動のいわゆる産出物の意味があり、実施者の振り返りと、次の活動へつなぐためのヒントの役割を担う。すなわち目に見える成果物から、具体的に何をすればよいのか、改善点は何かが明確になる利点がある。

印刷物は次の三つである。

①「文化の森魅力発見-あそび方のスメー」
文化の森総合公園にて、国際センターサマースクール参加者 40 名が選んだ写真を基に、「文化の森」の楽しみ方を提案したマップ。

②「日和佐の魅力発見！フォトマップ」
(H26、H27 年度に続いて 3 作目)
街歩きをしたキャラバン隊の選んだ写真に日本語・英語・中国語のキャプションをつけた。表面は祭りの風景、裏面は町の見どころを紹介し、観光にも使えるようにしたマップ。

③「街探!!Awa ぶらり～高校生が Awa バウンドできるん!?!～」
前述の国際センターサマースクール参加者と市内の高校生との街歩きの様子をマップにしたもの。徳島青年会議所が作成。

④「あわっ子文化大使」2 種類
A：遍路道紹介パンフレット
B：AWA Ningyo Joruri (阿波人形浄瑠璃)
AB 二つとも「あわっ子文化大使」の中学生と取材したものを外国人観光ガイド用に英語と日本語表記で作成した。

③と④はキャラバン隊との連携によって、企画し、アイデアを擦り合わせて実物となった。映像は次の二つである。

①「文化の森魅力発見」(4 分半)
キャラバン隊が撮ったお勧めスポットの写真 40 枚をつないだもの、印刷物①を撮った 19 グループの 60 人が登場する。

②「オデオン座国際プロジェクト」(3 分)
1 月 22 日のオデオン座での様子をダイジェスト版としたもの。

これらは徳島大学国際センターホームページ動画集、あるいは徳島大学動画集から視聴が可能である(注 5)。

いずれも、活動を一過性のイベントとして終わらせないように、記録としてだけでなく、一つは多くの人に見てもらい、自分たちの町や組織の活動にキャラバン隊が参加できないかを考えるヒントにしてもらうことが目的であっ

た。また留学生らにとっては自分の写っている映像を自国の友人や家族に見せて、地域の活動に参加したことを広く発信する可能性も考えて作成した。

3. PLAN1 市内を中心とした多様な活動

今年度は 5 月から 2 月の間に 32 の活動を実施した(参考資料 1)。

①「あわっ子文化大使発信力育成プロジェクト」
(徳島県教育委員会)

中学生が県内外にあわ文化発信のための資料「英語版あわっ子文化パンフレット」を作成する。取材(5-6 月)に始まり、英語訳作成(8 月)・実際に資料を使ったガイド活動(10-11 月)を支援した。

②「外国人旅行者受入事業」
(徳島県生活衛生営業指導センター)

徳島を訪れる外国人観光客の受入体制を強化し、良質なサービスを目指し、徳島の食やおもてなしを世界にアピールすることを目的とした事業である。6 月から 9 月に 7 回(公衆浴場・理容・すしそば調理体験・クリーニング・阿波ブランド肉の試食・社交飲食・美容着付け等)の体験活動をして、観光客側からの感想やアドバイスをを行った。

③○「多文化共生と国際化講座」
(徳島県自治研修センター)

平成 17 年から実施している講座で、県職員がキャラバン隊との交流を通して徳島県の国際化に向けての取り組みを考え、最終課題はミニドラマにして発表する。(11 月)

○「茶道体験講座」(徳島ユネスコ協会)
平成 27 年から、国際センターサマースクール(8 月)にてユネスコ協会が中心となって茶道を通して高校生や地域の人と実施した。40 名の留学生と交流をした。

これらは学内で実施している。

④「文化の森魅力発見！プロジェクト」
(徳島県文化の森総合公園)

以前は「美術館パフォーマンス鑑賞会」のように、日本人と新たな鑑賞をする活動のみであったが、今年からは博物館・美術館・図書館等のある文化の森総合公園を舞台に、地域住民や高校生らと交流活動を行うことができた。ユニバーサルミュージアム(全ての人を楽しめる場作り)事業を新たな形で実施した。

⑤「外国人遍路」事業
(NPO 法人徳島共生塾一歩会)

3 年目の今年度は 11・12 月に実施した。人権尊重の考えから全ての人が修養の場とし

て遍路をとらえ世界に発信することを目的としている。さらに2月には、新たな試みとして「外国人と一緒に歩こう」と日本人と在住外国人が歩く機会を持った。

- ⑥ 「多文化共生とわたしたち・2年生対象」
「徳大留学生訪問交流会・1年生対象」
(徳島市立高等学校)

2009年から高大連携教育活動として実施している。この二つを軸に高校生の有志がキャラバン隊として他の活動に参加している。市内の街歩きをはじめとする、PLAN3日和佐の祭りにつながる活動である。これらの経験を基に市立高等学校は地域や外国人らとの連携事業を手掛ける部署「みらい共創室」を1月に開設している。

- ⑦ 「街探!!Awaぶらり」(徳島青年会議所)
青年会議所が企画した高校生と外国人留学生との交流を支援し、活動の企画と最終成果物等のヒントをキャラバン隊が提案した。

- ⑧ 「徳島ならではの!グローバル戦略」
(徳島商工会議所)

今年度はこれまでの事業「徳島商品のモニター事業」「徳島のおみやげプロジェクト」「県内の経営者との意見交換会」以外に、商工会議所からキャラバン隊が実施する他の事業の支援を受けることができた。

PLAN2・PLAN3の交通費及び食に関する資金援助という形で様々な活動の実施が可能になった。

今年度新たに協力連携したのは図4の①②⑦であった。そして⑧の商工会議所は、キャラバン隊の包括的支援を行う存在であったことも記しておきたい。予算が無い中、相手先の支出であったり、また折半であったりと連携のおかげで多くの活動が実現できた。



図4 PLAN1の協力機関との関係

4. PLAN2オデオン座国際プロジェクト

今年から名称を「オデオン座国際プロジェクト」に変更し、通算の実施が7回目を迎えた活動である。実施に向けて27年度中に予算確保を準備し、3月の時点で平成28年度公益財団法人日本教育公務員弘済会本部奨励金の助成が得られ実施の目途が立った。

そこから美馬市との打ち合わせを行い、市及び教育委員会の協力を仰いだ。その後開催日や宿泊場所の確保等の調整を行った。一方、演劇に関して演出家の仙石氏と相談しつつ、9月からは新たな演目として宮沢賢治の「度十公園林(けんじゅうこうえんりん)」を選び、演者の絞り込みを行った。10月の後期授業の開始とともに、「日本事情IV(留学生対象の日本語及び日本文化を学ぶ授業)6名」及び「日本語教育教材研究論(日本語教員養成科目)7名」さらに「日本語研修コース(初級集中日本語学習クラス)10名」の受講者の参加を決めた。最初に作品の読解を行い、東北弁で書かれたテキストの理解から、演出家によるシナリオの読解、さらに全員でセリフを阿波弁(徳島の方言)に変える作業を丁寧に行った。1月まで仙石氏及び四国学院大学の学生が徳島大学を訪れ演劇の練習を行った。冬休みには各自がセリフを覚える作業を行った。

今年度はさらに高大連携事業で協力関係にあった脇町高等学校にプロジェクト参加の要請をした。脇町高校はSSH(スーパーサイエンスハイスクール事業)校として、選ばれた20名の生徒が12月に台湾への研修旅行を実施しておりその報告とともに、21日の街歩きとスピーチ作成の支援をお願いしたところ了承を得られた。

プロジェクト当日の1月21-22日はキャラバン隊が「演劇班」と「街歩き班」の二つに分かれて活動を行った。1月21日、脇町に到着後、オデオン座にて「演劇班」は四国学院大学の学生と演劇の最終仕上げの練習を、そして「街歩き班」は、脇町高校生と14のグループになって「うだつの町並み」を歩いて写真を撮り、1枚の写真を選び日本語と英語のミニスピーチを作成した。

1月22日オデオン座では、以下を実施した。

- 1) 「うだつの町の魅力発見」前日の街歩きの成果報告
- 2) 「度十公園林(宮沢賢治作)」上演
- 3) 「SSH台湾研修報告」脇町高校生による12月の研修報告
- 4) 参加者(キャラバン隊・観客)全員による多文化交流会

キャラバン隊25名、四国学院大学10名そして脇町高校生、地域の方々総勢120名で、脇町劇場オデオン座にての交流ができた。

事業アンケート（キャラバン隊25名及び来場者35名から回収）の結果は、キャラバン隊25名は高校生や来場者と交流ができたことや演劇活動の楽しさに関しておおむね満足をしてきたことや、来場者も多くの人との出会いが楽しかったことが述べられていた。双方とも満足度が高く、さらにオデオン座での演劇や発表のおもしろさに気づいたというコメントも得られた。

このプロジェクトは、実践研究として日本語教育と演劇的知の在り方を考えることと、文化財としての脇町劇場オデオン座（物的リソース）の存在を重視しさらに活用方法を提示することを目的としている。今年度は学内の**日本語教育者**（外国人に日本語を教えると同時に日本語教師を養成する視点）と学外の**演劇教育者**（演劇を通した様々な学びを追究することや演劇を学ぶ人の存在から何が学べるのかを考える視点）と美馬市の**脇町高等学校**（高校生の多文化理解や言語教育の動機づけの視点）の、それぞれに違った目標を持つ教育者の連携が可能となった。今後もこの連携を基に、最終プロダクトを演劇やプレゼンテーションといったパフォーマンスとする教育活動を続ける予定である。



図5 オデオン座国際プロジェクト関連図

5. PLAN3 日和佐の魅力発見！プロジェクト

本プロジェクトは、公益財団法人中島記念国際交流財団助成による平成28年度留学生地域交流事業として採択され実施が可能となった。キャラバン隊が美波町日和佐八幡神社の秋祭りの二日間に参加し、日和佐の町の魅力を発見し、それを国内外に広げることから町の活性化

を図るものである。四回目の今年は、男性24名が少子高齢化のため担ぎ手の少なくなった二つの町（本町と西新町）の「ちょうさ（太鼓屋台）」と呼ばれるみこしを担いで一日目は「町周り」を、二日目は「お浜出（ちょうさを担いで海に入る）」を体験した。

一方、女性22名（徳島市立高校生と徳島大学・鳴門教育大学・阿南工業高等専門学校の留学生）は日和佐中学校生の有志と地域のボランティアガイドらとともに五つのグループに分かれ、一日目は漁師町を廻って写真を撮り、お気に入りの一枚を選び英語・中国語・日本語のキャプションを協力して付ける作業を、そして日和佐の魅力を見つける活動を行った。二日目は祭りを楽しむとともに男性らの勇壮ぶりを応援した。

一日目の夜祭りの際には、八つの町の太鼓（祭りでは、各ちょうさに子供たちが乗って太鼓をたたき続ける）の音比べの審査員としてインドネシアとスウェーデンの学生が参加し、町の人たちと相談して優勝を選ぶ姿も、祭りにキャラバン隊が受け入れられていることを物語っていた。

今年も一日目の町歩きと二日目の祭の様子を掲載したマップをデジタル版も合わせて作成することができた。参加者はもちろん地域の人たちへの配布も行え、祭りの魅力とともにたくさん外国人留学生らが祭りを支援していることを知ってもらい、将来の参加者を募ることも目標としている。

参加したキャラバン隊に対する事業アンケート（50名から回収）では、男女全員が地域の人たちと交流ができた、そしてほぼ全員が満足したとしている。またこの祭りの素晴らしさと地域の人たちの優しさに触れられたことを記述していた。

一時は開催が危ぶまれた祭りが実施できているのは、祭りを支援する「ちょうさ保存会」をはじめとする様々な組織の努力のたまものである。担ぎ手を広く募集し、フォトコンテストを実施して選ばれた写真によるカレンダー作成等も功を奏している。特に29年度11月のカレンダーには、キャラバン隊の女子留学生4名が祭りを楽しんでいる写真が選ばれ、国際交流のできる祭りとしての知名度も上がったと考える。そして平成28年度の第21回ふるさとイベント大賞（一般財団法人地域活性化センター）の「ふるさとキラリ大賞」を受賞した。受賞理由に外国人参加を積極的に促し、新たな地域活性化の姿を提示したことが挙げられている。4年続けたことによって一つの成果が見ら

れた。

また、今年度より、美波町が申請した文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業・地域日本語教育スタートアッププログラムが採択され、国際センターがコーディネーターを務め地域での日本語教育を中心とした多文化共生活動を支援することになった。これまでに取り組んできた美波町における地域リソースの掘り起し、実績及びネットワークの構築が新たな活動につながったと言える。このプロジェクトは、新たな高大連携を追究しながら、自治体を中心として地域の中学・観光ボランティア・企業が協力するフィールドワーク型プロジェクトワークである。成果物でもあるフォトマップを活用し、これを基に町おこしに取り組む団体や人々と協力して、新たな展開に取り組むつつある。

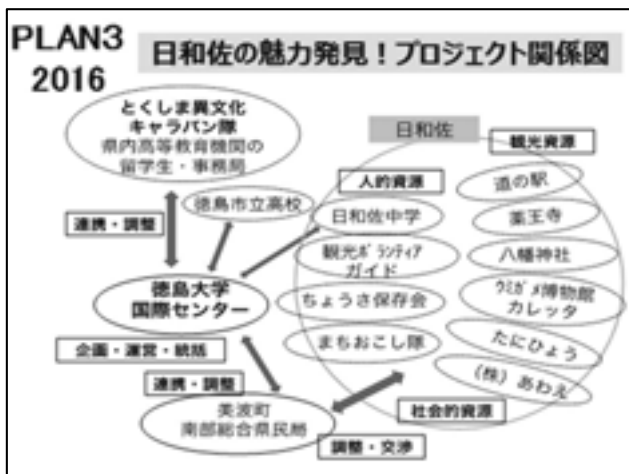


図6 PLAN3 協力関係図

PLAN2.3 いずれも社会貢献の活動として、大学あるいは高校の教科学習と結び付け、教育課程の中で正式に位置づけ、サービスラーニングとして整備していく予定である。

6. 考察

以上のように、2016年度のキャラバン隊の活動を概観した。3年間の文部科学省の委託から自立し、4年目の本事業のいくつかの変化を記しておきたい。

キャラバン隊事業は、パートナーとなる相手と互いの目標を擦り合わせながら、活動を企画そして実施、最後には振り返りを共に行うことを基本としている。「イベントをするので何人かの留学生の派遣をお願いします」という依頼に応えるものではないことも確認しておきたい。それは留学生らも、相手先の人も両方を尊重し、互いの学びをできる限り考えた内容にし

たいという思いからである。そして何よりも互いの目的の最上位にあるのが「多文化共生」を実現するための一歩を踏み出すことである。

事例①：PLAN1のNPO法人徳島共生塾一步会とは、前述のように2014-15年度で4回、2016年度に2回で計6回の「外国人お遍路体験講座」に参加し協力関係にある。代表者らと何回も打ち合わせを重ね、先達、通訳（英語と中国語）の確保やルートの確認にも関わった（注6）。この会は四国八十八箇所霊場と遍路道を世界の文化遺産として守るために、10年以上も遍路道の整備から取り組んでいる環境団体である。2014年の遍路道でのヘイトスピーチ事件をきっかけに、遍路文化を外国人に理解してもらい世界に発信することから、遍路文化を国の内外から見直そうという立場にあった。人種差別から出発してそれを無くするための具体的な取り組みとして、キャラバン隊に依頼があった次第である。これ以外にも外国人お遍路さんを迎えるための「おもてなし実践講座」も開催し、遍路を通して外国人と地域の日本人をつなぐ活動をしている。今年度は実際に遍路道を日本人と外国人と一緒に歩くという試みをキャラバン隊側から提案したところ、受け入れられ12月18日に実施の運びとなった。総勢50人の大人数の参加となったが両者の人数バランス（グループ作りの不手際）、また参加者の目的の事前確認、お遍路マナーの確認等の点で必ずしも、両方の目的が確認できたわけではなかった。これも反省材料として、次につなげる話し合いができる関係性も大切なことと実感している。

「一步会の課題が外国人の人権尊重から別の角度で多文化共生を考えることがあらたに始まっていること」、そしてそれに対してキャラバン隊に何ができるかを一緒に模索を始めた段階である。

事例②：徳島市立高等学校とは、本稿3.で述べたように高大連携の制度を活かし、高校から大学への教育を分断するのではなく何らかの形で継続した教育を実現することを考えている。今回特筆したいのは、高校が自ら「みらい共創室」という部署を開設し、地域住民や大学さらに外国人との連携を作る活動に取り組んだことである。教育の中でグローバル化を英語教育や海外修学旅行や研修だけに限定するのではなく、「足元は地域にありつつ視点は遠くを見渡せる人材を作る」という目的を共有し、互いにできる限りの教育活動を行っていく予定である（注7）。

留学生や大学教員が高校を訪問するだけでなく、徳島市内や美波町の街歩き、文化の森

の案内、日和佐の祭り参加といった地域を舞台にそれぞれの教育目的の実現のために連携できる可能性を大切にしたい。高校と大学が企画した活動で、高校生と留学生が共に刺激し合い考え一つの課題に対して話し合う姿を期待し、この体験が互いの様々な学びにつながるとしている。ことばが完全に通じなくても互いに尊重し合って、意見や考えを伝え合う「対話」を体験するという意味で関係性を続けていきたいと考えている。

さらに活動を続けていく中で、高校時代にキャラバン隊活動をした生徒が徳島大学へ入学をし、さらに今度は大学生として活躍する者が現れ現実に学びが持続することも可能となった。市高に限らず、チラシやホームページ等を見た入学希望の高校生から、徳大入学後キャラバン隊に入れるのかという問い合わせも数件あった。これらの活動が高校生に対して魅力のある大学の要素となっているのだろうか。

事例③：PLAN 1 の④の文化の森総合公園では、その中の美術館、博物館とユニバーサルデザイン関連事業で外国人からのアドバイスを提供し、それぞれの場で鑑賞あるいは見学プログラムを行ってきた。特に今年度からは、これまでの活動に加えて、県立 21 世紀館に新たな企画を持ち込み、いくつかの活動が実現した。8 月には徳島大学国際センターのサマースクール参加者とキャラバン隊（留学生・日本人学生・高校生で組織）が魅力発見活動を行った。

続いて、2016 年 3 月に結成された徳島 GG クラブ（総務省が推進する善意通訳ボランティアを県が掌握する会）のメンバーが、通訳しながら「文化の森」を紹介、そして一緒に楽しむことを行った。語学そのものの研修ではなく、実際のコミュニケーションを通して外国人と地域について学ぶことを提案した次第である。12 月と 2 月に実施し、2 月はウインターフェスティバルの様々なプログラムに参加して、GG クラブの日本人とキャラバン隊が英語・中国語・日本語で交流することができた。日本人側の県の施設に対する認知度を上げて、通訳すること以外に自らが楽しむ場として認識してもらい、これからの観光客対策の一助を担うことを目的とした。これによってキャラバン隊と美術館等のそれぞれの線的なつながりが面的なものとなり「総合公園」として利用者にとっての魅力が広がることを期待したい。

事例①は生涯教育、②は学校教育、③は社会教育に分類されるが全て教育に関わる活動である。違った分野かつ関わりとして事例④をあげる。

事例④：本稿 3 の PLAN1 の⑧徳島商工会議所とは、いくつかの連携活動を実施してきた。話し合いを進めていく過程で、キャラバン隊の他の活動が商工会議所の目指す「地方創生そして徳島の未来づくりのなかのにぎわいのあるまちづくり」に合致しているとして賛同を得られた。それによって広く PLAN2 の美馬市及び PLAN3 の美波町、そして PLAN1 徳島市内の「文化の森」の活動のための資金援助が受けられることになった。観光、インバウンドを含んだ経済振興の立場からの支援は事業運営にとってありがたい存在であった。

また、今年新たに依頼のあった、生活衛生営業指導センターと「あわっ子文化大使」の活動は両方とも外国人観光客に焦点が当てられていた。3 年間の広報が実を結び、外国人の視点からのアドバイスを提供した。

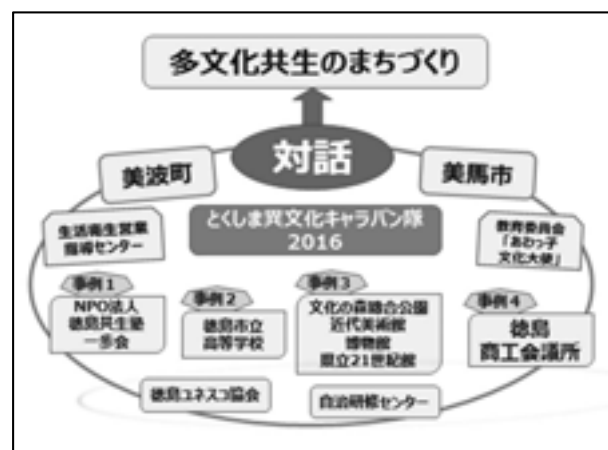


図 7 多文化共生の目標をもとに

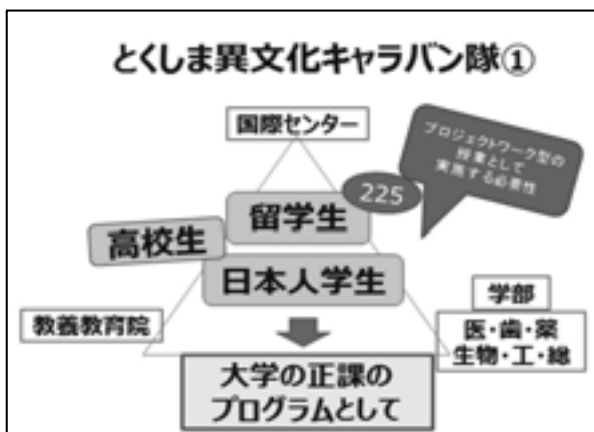
このように拠点事業から始めて 4 年の間様々な相手先と連携してきた。とくに「多文化共生」を目標として対等な関係の中で互いのできることや役割を尊重し、何度も話し合う事によって新しい視野が開け、新たな創造的な活動が生み出された。すなわち「対話」が確認できたときには、今後も協力関係が続けられると考える。コンソーシアム内の関係性は明確になったが、一方のこの事業の目標である「受け入れる心を育てる」は、どのように評価できるのだろうか。すなわち活動を続けていく中で徳島地域の人たちの意識を変えていくことができているかどうかである。

徳島新聞「読者の手紙」2017 年 2 月 15 日付に 65 歳の会社役員の男性の投稿「外国人受け入れ定住促そう」が、これを受けて 23 日には「外国人労働者現状を見ると」と 66 歳の女性が労働者を受け入れることに対しての違った意見を述べている。新聞紙上でこのような対話

が起きていることを重要視したい。地域の人が自分の問題として考えていく際、様々なメディアからの情報とともに、身近に様々な人たちがいてその人たちとの関わりをとおして、新たな地域を外国人と作る気持ちになれるのかを、この事業は時間をかけて問いかけていく必要がある。すなわち「対話」をする関係をつくれるかである。本事業を継続することによって、たとえ少数であってもキャラバン隊に触れる人たちが自らの判断によって、自分の意見を持つことを、さらには意識を変えていくことを期待したい。

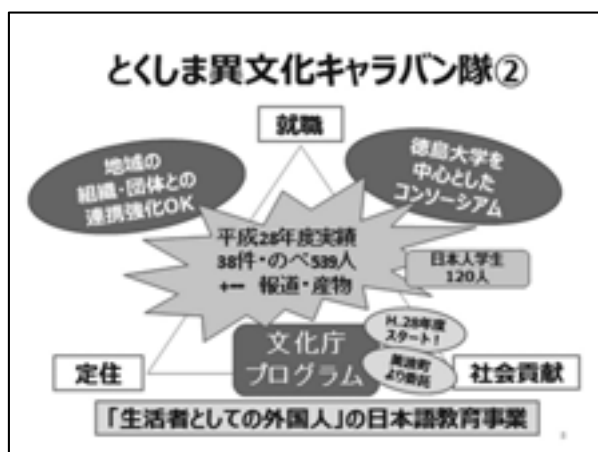
7. むすびにかえて

とくしま異文化キャラバン隊の今後の在り方を以下の三点に集約し提示する。



①大学の教育プログラムとして

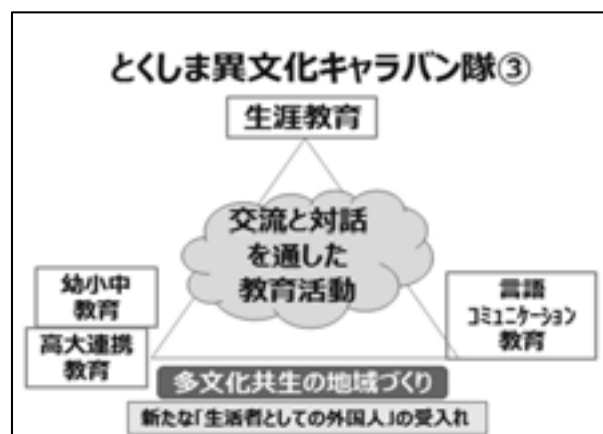
これまででは留学生交流拠点事業として留学生が主体となることを念頭に置いていたが、より広い視野から、日本人学生及び高校生をも含めた活動とする。県下の高等教育機関とのコンソーシアムを維持しつつ、徳島地域の活性化を目指し、さらに大学の正課のプログラムとして実施できるように整備する。



②「生活者としての外国人」事業へ

前述の平成28年度から始まった文化庁の「生活者としての外国人」事業と合わせた展開を進める(注8)。この事業は日本語教室の無い地域に日本語学習の場を設定しながら、多文化共生を住民に考える機会を与えることも目的としている。美波町は現在も呼びかけている移住者に「外国人もOK、日本語教室もあります」として、外国人の移住も受け入れる新たなモデルとなりうるかが問われている。

また新たな文部科学省の留学生就職促進プログラム(平成29年～公募開始)では、留学生の地域での就職を促進するための、日本語教育及びインターンシップを実施するための施策を開始した(注9)。法務省との連携で就労ビザ等の切り替えも検討されている。知日派、親日派としての留学生への期待がより大きくなっている。大都市とは違って就職を希望する留学生と受け入れる企業の数のアンバランスがあるという実情もやはり「受け入れる」体制作りが必要なのであろう。



③様々な教育の実現形として

これまでに述べてきたように、フォーマル及びインフォーマルな、また学校教育、社会教育、生涯教育、さらに言語・コミュニケーション教育にもわたり、交流と対話を通じた教育活動を実現していくことが可能である。

これらを課題として掲げ、今後もこれまで培った協力関係をさらに拡大し、徳島を舞台に多文化共生を実現するための活動を推進したいと考える。

謝辞

今年度も新たに企画・実施・そして反省評価等の次につなげる活動が行えました。丁寧な対話を通して一緒に活動を行えた関係団体に感謝を表します。また実施にあたって予算や学外

活動等の事務部門の対応がなければこれもまた実現できなかったことです。常に迅速かつ適切な対処をしてくれた国際課にも深く感謝します。

注

- 注 1. 事業の詳細は参考文献「多文化共生のまちづくり・未来への体一步-提言作成とフューチャーセンター」及び「留学生との交流による多文化共生のまちづくり-とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して-」を参照されたい。平成 28 年度はキャラバン隊の活動数 36、参加人数 509 人であり、過去 3 年の累計 1008 人（H25 年度 168 人、H26 年度 385 人、H27 年度 455 人）を越えた。関係機関（県内の地方公共団体、NPO 法人、企業、初等中等教育機関等、39 団体）に関しても新たな参入があり拡大している。また、徳島県内の高等教育機関 7（香川県 1 校含む）、NPO 法人 10・企業、地方公共団体 6 との間のネットワークも維持されている。
- 注 2. 過去 3 年間の事業（四つのプランと活動記録）に関しては徳島大学国際センターホームページ、留学生交流拠点整備事業活動記録を参照のこと。
<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/>及び
<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/page/blog.html>
- 注 3. 参考文献：徳島大学国際センター編集（2016）『多文化共生のまちづくり-未来への第一歩』平成 25-27 年度文部科学省留学生交流拠点整備事業報告書。国際センターホームページ内出版物のその他の印刷物にて電子書籍として閲覧が可能である。
- 注 4. 詳細は「多文化共生のまちづくり・未来への第一歩-提言作成とフューチャーセンター」2015 年度徳島大学国際センター紀要 P. 37-46 に詳述。
- 注 5. youtube「2016/8 文化の森魅力発見プロジェクト」にても視聴可能。
- 注 6. 参考文献報告書『多文化共生のまちづくり・未来への第一歩』p7-9 に詳細を記述。
- 注 7. 参考文献、生駒他 2 篇参照のこと。
- 注 8. 文化庁が実施する地域に居住する外国人に日本語を学ぶ機会を提供し、外国人を地域活性化の重要な人的リソースとするプロジェクトである。詳細は以下を参照されたい。
http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_n

ihongo/kyoiku/

注 9. 日本経済新聞がとくしま異文化キャラバン隊の活動をとりあげ、これまでの様々な取り組みが地域振興に貢献していることや、さらに留学生が地元を支える人材として地域での就職受入が進む可能性について示唆している。
（2016 年 11 月 23 日朝刊「大学」欄）

参考文献

- Gehrtz 三隅友子（2016）「多文化共生のまちづくり・未来への第一歩-提言作成とフューチャーセンター」2015 年度徳島大学国際センター紀要 P. 37-46
- Gehrtz 三隅友子（2016）「留学生との交流による多文化共生のまちづくり-とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して-」ウェブマガジン『留学交流』2016 年 7 月号 Vol. 64P. 1-12
- 徳島大学国際センター編集（2016）『多文化共生のまちづくり-未来への第一歩』平成 25-27 年度文部科学省留学生交流拠点整備事業報告書
- 長田英史（2016）『場作りの教科書』芸術新聞社
- 生駒佳也他（2012）「地域の国際化を目指す高大連携の可能性-交流活動をもたらすもの-」徳島大学国際センター紀要 p. 25-31
- 生駒佳也他（2014）「地域の国際化を目指す高大連携の可能性Ⅱ-とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して-」徳島大学国際センター紀要 p. 35-49
- 暉峻淑子（2016）『対話する社会へ』岩波新書 1640
- 中島義道（1997）『＜対話＞のない社会』PHP 新書 032
- 毛受敏浩（2016）『自治体がひらく日本の移民政策-人口減少時代の多文化共生への挑戦』明石書店
- M. ケーシー（2016）『コンテンツストラテジー』ビー・エヌ・エヌ新社
- 山本敦久（2016）『身体と教養』ナカニシヤ出版
- 渡辺靖（2015）『＜文化＞を捉え直すーカルチュラル・セキュリティの発想』岩波新書 1573

資料1

とくしま異文化キャラバン隊2016 実績 ※活動内容は国際センターブログに記録

日付	PLAN	活動名(記事名)	キャラバン隊	日本人学生
5月11日	I	あわっ子文化大使活動 県教委による概要説明(徳島大学)	11	19
5月18日	I	人形浄瑠璃講座	11	19
5月21日	I	吉野川クルーズと人形浄瑠璃体験	13	0
5月25日	I	四国遍路講座	13	19
6月4日	I	四国遍路体験 鶴林寺・立江寺・恩山寺	8	1
6月23日	I	吉の温泉:公衆浴場見学及びミニ体験	8	0
6月30日	I	シセイ理容館:理容業見学と体験	8	0
7月7日	I	寿司のにぎり蕎麦打ち体験(徳島大学フューチャーセンター)	12	0
7月12日	I	徳島市立高校「多文化共生とわたしたち」	1	0
7月14日	I	長尾クリーニング工場見学とアイロンかけ体験	8	0
7月14日	I	ドイツ人高校生と交流活動	17	14
7月21日	I	徳島ブランド「阿波牛・阿波とんとん」食体験 ふれあい健康館	9	0
7月23日	I	美術館パフォーマンス鑑賞会 徳島県立近代美術館	3	0
7月28日	I	ラウンジSelene 社交飲食体験	7	0
8月3-4日	I	「あわっ子文化大使」活動 パンフレット作成(徳島大学)	16	19
8月3日	I	「徳島県日本語弁論大会」出場者と徳島GGクラブ会員の交流会	6	0
8月6日	I	「街探!!AWAふらり」活動 青年会議所	65	0
8月7日	I	「文化の森魅力発見!プロジェクト」文化の森総合公園	61	0
	I	「邦楽と茶道の体験」徳島大学サマースクール	0	0
8月23日	I	日本の味「松浦酒造、福寿醤油工場」見学 北島町国際交流協会	7	0
8月18日	I	平和と未来遺産広島スタディツアー参加 徳島ユネスコ協会	0	0
9月16日	I	着物着付け体験 徳島県美容業衛生同業組合	11	0
10月8-9日	Ⅲ	日和佐八幡神社秋祭り2016 美波町日和佐	30	16
10月23日	I	「那賀町の魅力発見!」	10	3
10月29日	I	「あわっ子文化大使」鶴林寺・お遍路ガイド活動	25	0
11月3日	I	「あわっ子文化大使」人形浄瑠璃・農村舞台ガイド活動	20	0
11月4日	I	徳島県自治研修センター「多文化共生と国際化講座」	22	0
11月17日	I	「那賀町の魅力発見!」活動報告会	13	4
11月19日	I	外国人お遍路体験(薬王寺)NPO法人徳島共生塾一步会	7	0
11月26日	Ⅲ	ひわさ・にこにこ人権フェスティバル 美波町	2	0
12月4日	I	徳島GGクラブ研修会 文化の森総合公園	7	0
12月10日	I	外国人お遍路体験(霊山寺~地藏寺)徳島共生塾一步会	16	0
1月20日	I	徳島市立高校訪問・交流	14	0
1月21-22日	Ⅱ	オデオン座国際プロジェクト2016 美馬市脇町	37	0
1月29日	Ⅲ	「在住外国人を対象とする防災ワークショップ in 美波」美波町	11	0
2月9日	I	留学生の就労問題及び地元経営者との意見交換会 徳島大学	10	5
2月11日	I	徳島GGクラブ研修会 文化の森総合公園	11	0
2月18日	I	一緒に四国遍路を歩こう(大日寺~井戸寺)徳島共生塾一步会	8	0
総数		38活動	538	119